

令和6年度第1回 岐阜市立女子短期大学運営委員会報告書

1 日 時 令和6年7月24日(火) 9時55分～11時45分

2 場 所 岐阜市立女子短期大学 大会議室

3 出席者 (1) 外部委員(1号委員) 出席4名
片岡委員、後藤委員、近藤委員、廣田委員
(2) 学内委員(2号委員) 出席4名
畑中学長、服部副学長、大澤附属図書館長、久米事務局長

4 次 第 (1) 委員の役割
(2) 本学の概要
(3) 学生の動向
(4) 地域貢献・連携の状況
(5) 将来構想の動向

5 委員の意見

○意見1

国際コミュニケーション学科の定員充足率が低いのは、他学科に比べ、一般職への就職が多く、専門性が薄く見えるからではないか。韓流スター、K-POPの影響で英語だけでなく、韓国語や中国語を学びたい需要があるため、その点は強みだと思われる。

○意見2

国際コミュニケーション学科は、健康栄養学科やデザイン環境学科のように、学ぶ内容が直結する就職先、例えば通訳など、具体的な情報発信があるとよい。

○意見3

介護、診療、障害福祉報酬の改定により、栄養士に比べ、管理栄養士の需要が高まっている。東海地方は管理栄養士課程が多い地域であるが、公立の課程は少ない。優秀な学生を取りこぼさないため、管理栄養士課程の整備、四大化を期待する。

○意見4

四大化に向けては、岐阜市の活性化や学生募集を有利にするため、街中へキャンパスを移転するのはどうか。街に近い方が学生のデザインセンスが磨かれると思われる。また、変化の激しいグローバル社会ではDXの能力も必要。

○意見5

コミュニケーション力の高い学生が、社会や企業に求められている。社会では様々な職種の人と良好な関係を築き、顧客の立場を理解して仕事をする必要がある。また、昨今、問題となるハラスメントの要因はコミュニケーション不足もある。コミュニケーション力をどのように身につけるかは、個人差があるが、大学でできることとしては、授業やインターンシップの他に、地域連携の中で、様々な立場の人と関わり、座学に留まらず、実践的な活動を行うことではないか。